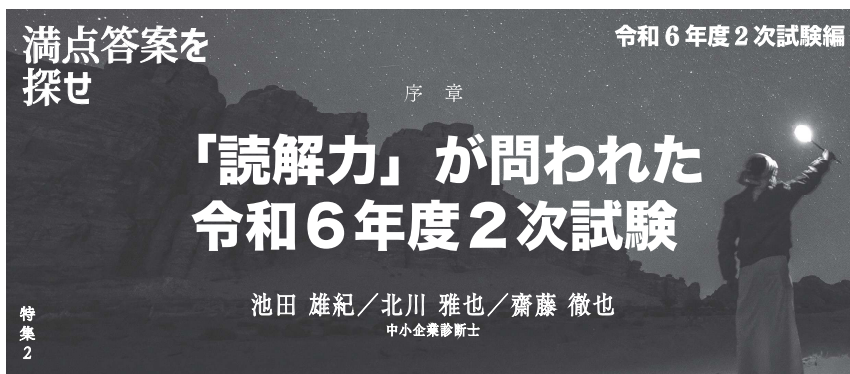




本特集は、2次試験では都市伝説とされるほど希少といわれる満点答案を探し当て、その秘訣を探するという趣旨で始まった。2020年4月号のスタート以来、タイトルと内容を変化させながら、今回で6回目を迎えた事例企画である。これまで毎回、満点答案に出会えたわけではないが、高得点者の戦略・習慣・行動パターンをインタビュー形式で紹介し、合格の本質に迫ってきた。

高得点者に共通する思考の型には、どのような特徴があるのか。高得点者は、2次試験に対してどのような準備をし、当日、80分という限られた時間の中で、どのような判断を積み重ねてきたのか。今回も、インタビューを通じて、再現性のあるプロセスを可能な限り可視化し、受験者の皆さんが自身の学習に取り入れられるヒントを提示したい。

掲載を重ねるにつれ、私たちは満点答案を探し当てることの難しさを痛感してきたが、今回は幸運にも、事例Ⅳで2つの満点答案とその作成者に出会うことができた。

まず、今回、満点答案者や高得点者たちへのインタビューを担当した執筆陣をご紹介します。

	池田 雄紀 「満点答案を探せ」プロジェクトリーダー。序章・終章担当。金融機関で人事を担当しながら、パラレルキャリアを開拓。現在は若手複業人材集団「BRMz」で奮闘中。
	北川 雅也 第1章（事例Ⅰ）・第2章（事例Ⅱ）担当。IPOコンサルタントやIT企業での管理部門役員を務めた後、独立。診断士試験は、令和5年度一発合格。
	齋藤 徹也 第3章（事例Ⅲ）・第4章（事例Ⅳ）担当。製造業で生産技術、生産管理を経験し、段取短縮、小ロット化、リードタイム短縮、生産性向上を担当。令和5年度合格。

特集内イラスト：峯松 孝佳

される傾向が強くなっているように感じる。

3 インタビューまでの経緯

(1) 満点答案を探して

合否の結果通知時に、受験者の得点が事例ごとに開示されるようになって3年目となり、試験後にはX（旧 Twitter）を中心に、自己採点結果や得点のスクリーンショットが投稿される風景が定着しつつある。しかし、SNS を利用していない受験者も多く、本当にすごい答案は、まだ見ぬところに存在している可能性がある。

そこで、私たちは、各種SNSや資格学校関係者、勉強会のネットワークなど、あらゆるルートを通じて探索した。そして、いくつかの高得点答案とともに、事例Ⅳの2つの満点答案にたどりつくことができた。本年度の事例Ⅳでは、CVP や NPV の計算問題に苦戦したという声がネット上に溢れていたが、そうした条件下でも、満点答案は生まれていたのである。

では、こうした満点答案者や高得点者は、他の受験者とは異なる工夫をしていたのだろうか。それとも、何か特別な才能を持っていたのだろうか。

(2) インタビューに当たって

インタビュー対象者は、金融機関勤務、子育て中の社会人、大学卒業直後の受験者など、ライフスタイルも受験環境もバラバラであった。しかし、その一人ひとりが、型どおりに対応できない問いに対して、自分なりにアプローチを試行錯誤し、修正を重ねながら合格を勝ち取っていた。

インタビューでは、満点答案者や高得点者のこのような思考と行動の軌跡を丁寧に紐解いていく。設問の意図をどう読み解いたのか、迷ったときにどこで割り切ったのか。これらの点に注目して読み進めてほしい。

本編に入る前に、令和6年度の2次試験の動向とそ中でみえた変化、そして今回、満点答案者や高得点者を探し当て、インタビューに至るまでの経緯を、簡単に振り返っておきたい。

1 令和6年度試験の動向——1次知識の応用力が問われる傾向が強まる

令和6年度の2次試験は、受験者数8,119人、合格者数1,516人と、昨年度に引き続き合格者数が減少した。合格率は18.7%と例年並みの水準であり、決して容易に合格できる試験とはいえない。

事例別にみると、事例Ⅰでは1次試験科目の「運営管理」から「3PL」（サードパーティー・ロジスティクス）、事例Ⅱでは「企業経営理論」から「ブランド価値」（感覚価値・観念価値）、事例Ⅲでは物価高のいま、ホットなテーマである「価格交渉」が取り上げられている。1次試験で習得した知識を実務的文脈で応用する力が、これまで以上に問われる傾向が強まっていることがわかる。

2 最近の動向——与件文・設問文の読解力が問われる傾向が強まる

2次試験では、与件文や設問文を漠然と読み、答案を作成しているだけでは、80分という短時間で確からしい答えに近づくことすら難しい。

ここ数年の傾向として、設問文の前提や制約条件をどう解釈するか、与件文の含意にどれだけ目を配れるかが、得点の差を大きく分けているように感じられる。試験対策のセオリー化が進んだ現状に対峙するように、「キーワード」や「型」に依存するだけでは通用しにくい出題が多くなっている。

各事例を通じ、与件文や設問文の読解力が評価